

●領域性

この古い住宅街に取り囲まれた1989年に建てられた比較的新しい街区の全体的な形状は、複数の長屋建ての建築物（2階及び3階建て）から構成された真ん中に円形の広場を持つ四角形状を形成している。

目の前の駅とは地下道で繋がっている（写真4-7）。

写真4-7 市民の不安感の強い地下道



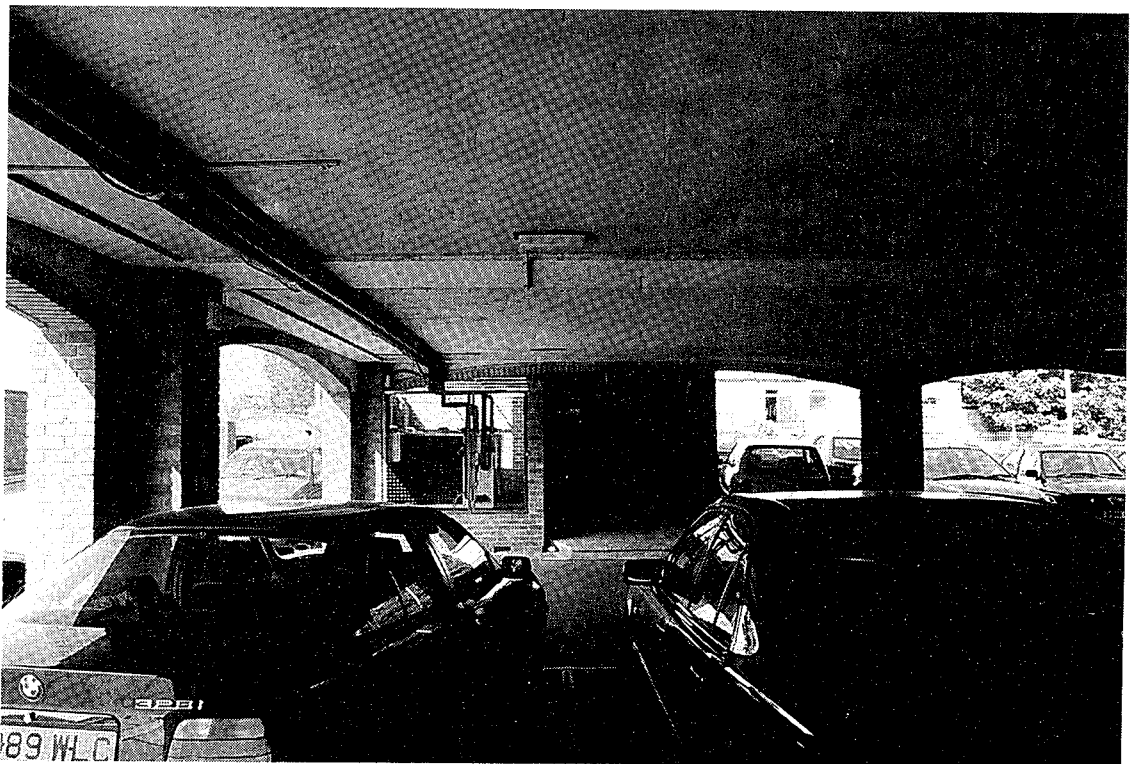
この地下道が人の視線を切るものとなり、通行人の不安感が高い（図4-10の地点番号⑤）。

さらに、この地下道を上がって住宅街に向かうのに、地下道を上がった部分が建物を延長して造られた駐車場になっており、そのため、暗く人の視線の感じない空間となって、通行人の不安感を高める（写真4-8。図4-10の地点番号④）。

また、駅からの接近に地下に一度降りて再度昇るという行動が面倒臭いこともあり、土手を勝手に上り下りして通行する自然道が出来上がってしまった（写真4-9）。そのために、折角フェンスと土手と建物とで構成した円形広場を中心とする（本来はコミュニティ空間として領域性を持つ）空間が、駅側の何処からでも接近することの可能な空間

となり、領域性を喪失してしまっている。それは、不審者を容易に中へ侵入させてしまう結果を生じている。また、円形広場を囲む建物の裏手から、不審者の接近を容易にさせてしまうという弱点を形成している（図4-10の地点番号⑥）。

写真4-8 地下道の出入り口に設けられた駐車場



さらに四角形を形成する4棟の建物の内、3棟は1階部分に店舗が入っている。また、残りの1棟も1及び2階は事務所となっている。このことによっても、領域感が低くなり、誰でもが徘徊可能な空間となっている。そのため、四角形の持つ完全な監視性（見守り）も効果が低いものとなっている。